

大学院修了にあたって

バンコクの思い出

生体材料学分野 本 間 喜久男



2007年11月の終わり頃、タイのバンコクで、日本歯科理工学会の「国際歯科材料会議」が開催された。私は、数種類の電解液中で陽極酸化した矯正用Ni-Tiワイヤの実験結果を発表すべく、バンコクへ向かった。初めての海外旅行だった。飛行機も、過去に1回しか乗ったことがなかったのである。学会発表は、初めてではなかったが、遠方であっても高速バスやフェリーを利用していたのだ。

成田空港で、日本円をタイ・バーツに替えた。タイの紙幣は、不思議な匂いがした。いよいよ、海外へ発つのであった。慣れない飛行機に乗って、バンコクに着いたのは夜であった。空港で、いきなり迷子になった。右も左も分からない。取りあえず、日本人らしき人が歩いて行く方向へ向かった。荷物が回転してたが、勝手に取って良いのかも分からず、しばし悩んだ。入国チェックの行列に並んで、言葉も分からなかったが、無事、通過した。タイ人ガイドの車に乗って、市内のホテルへ向かった。ホテルは立派だったが、古かった。荷物を運んでくれた兄さんに、初めてのチップを手渡した。翌日、観光だったので、すぐ寝た。

5時30分頃、日本時間なら7時30分頃、起きた。ネットでも書かれてたが、ホテルは水回りに欠陥があり、シャワーの調子が今一だった。数字を記憶させる金庫が、操作ミスで開かなくなり、警備のおじさんに無茶苦茶な英語を話して、何とか開けてもらった。

7時30分頃、タイ人ガイド(男)が迎えに来た。団車で観光。車中、ガイドはきれいな日本語で「男

が好きだ」とかオカシなことばかり言うのだったが、それはサーヴィスなのだった。気候は、日本の夏のようなのだが、蒸し暑くはなかった。「暁の寺院」を見るため、川を渡るのだった。汚い、木造の船着き場から、ハシケとでもいうべき船に乗った。川は浅いのか薄緑に濁っていた。遠く、高層ビルが、かすんで見え、異国にいることを実感した。対岸に着いた頃、国歌が流れ始めた。終わるまで、動いてはいけないのだった。遠くから見た寺院の塔は灰色だったが、近くで見ると陶製のタイルや食器がびっしりと貼り付けてあった。塔は、かなり危険な作りで、高所恐怖症の私は、途中までしか登れなかった。その後、王宮を覗いて、食事をした。宝石店では、彼女に買っていきなさいと日本語で言われ、そのような人はいないと返したら、老母に約2,800円のペンダントを買うはめになった。さらに免税店へ行き、ドライフルーツなどを買った。そこで解散となり、免税店のトゥクトゥク(3輪タクシー)で、駅まで送ってもらったのだ。

モノレールのような新しい電車で、バンコク中心街へ行った。セブンイレブンやファミマがあり、タイ製豆乳を買った。とにかく安く、量があり、甘かった。タイ語が全く分からないので、紀伊屋や伊丹を攻めた。日本の雑誌やマンガも売られてたが、かなり割高なのだった。タイ版のDVD『機動戦士ガンダム』(劇場版全3巻)を買った。ものすごく安い。多分、正規版だと思うが、一昔前はコピー商品があふれてたのがバンコクだった。何も調べないで入国したので、海外ゲームとかは見つけられなかった。言葉は通じないが、東京で買い物してるような感じだった。タイ料理のファストフードは、かなり辛口だった。外国人向けホテルよりも味付けがラブなのだ。道路の排気ガスには閉口した。

翌日、ポスター発表をした。英語で質問されると厳しい状況だったが、質問はなかった。言葉が

通じないというのは、不思議な感覚だ。数日間だが、極めて貴重な体験だった。最後に、学会発表をサポートしてくれた先生方に感謝したい。

大学院修了にあたって

生体歯科補綴学分野 川 崎 真依子

この内容での原稿依頼を頂いた時、「そもそも修了できるのだろうか？」と心配だったことは置いておくとして、気付けば、母校の日本大学を卒業してから新潟大学にお世話になって6年が経ちました。2年の研修医を終えてからの大学院4年間は、あっという間であったと言えるほど簡単に過ぎ去ってはくれませんでした。毎日が自分の人生観を確実に変えていったと思います。小学生レベルの歩みでお恥ずかしいですが、私の4年間で少しお話しすると、最初の1年目は、時間の使い方を苦労していたように思います。臨床の大学院生という立場でもあったために、臨床と研究の時間の割り振りが常に頭痛の種でした。ただ、私の研究テーマは臨床研究だったので、自分の患者様に被験者として協力していただく場合もあり、患者様とのコミュニケーション能力を高めることに集中できました。2年目と3年目は、ひたすら臨床研究のプロトコル作製の勉強をしていました。どんな実験でもそうだと思いますが、計画の段階でゴールを見据えたキメの細かい計画を立てないと、かなり痛い目に会います。そして、その2、3年目で詰め甘い実験計画をそのまま進めたために、4年目で苦労したのは、言うまでもありません。こういった話は、先生や先輩から耳にタコができるくらい言われていましたが、たいていは、自ら体験して初めて学習するものです。

それでは、暗い迷路の中のような4年間であちこち頭をぶつけながら私が何を研究していたかという、義歯の着脱を補助する器具を考案し、その評価を行う中で、超高齢化の進む現代の医療現場における歯科治療の問題点とその解決法を模索していました。現在の補綴治療で提供できる可撤性義歯は健常者を対象に考えられており、手指にある障害や、視力の弱い患者様にとって、維持装

置がついた義歯は、とても慣れるものではないのです。現代社会においては、安全に使用できる義歯の考案は急務であると考えています。本研究では、まだ1つの試みでしかありませんが、今後も要介護者のための補綴治療を考えていきたいと思えます。学位研究以外にも、補綴治療前後の患者様のQOLの測定と、咀嚼能率や咬合力を測定しました。この研究により、インプラントおよび可撤性義歯共に、治療後の患者様のQOLと咀嚼能率や咬合力を有意に向上させることが分かっただけでなく、さらに興味深いことに、患者様は可撤性義歯もインプラント義歯とあまり変わらない評価をしていることがわかりました。この結果により、現在の、インプラント治療ありきの治療方針に警鐘を鳴らすことができたと考えています。今後は、私達が、患者様のQOLに基づいた治療を行っているのが評価するための機構の立ち上げが求められていくと思います。この他にも、株式会社ブルボンとの共同研究で、嚥下が困難な高齢者のための補助食品の開発にも携わる機会を得て、実験計画の立案、生理学的手法の習得、企業との連携を学ぶ機会を得ました。さらに、4年目になり、基礎的研究にも携わり、違う視点を学んでいます。基礎研究の概念や手法を学ぶことで、臨床の現場で沸き起こる疑問を、臨床研究と基礎研究の両面から解明することができるようになることが今後の目標です。このように、私の4年間は、多くの研究の種を撒いただけだと思います。これからこの種に水をやり、大きな花を咲かせなくてはなりません。こんな私を見捨てずに支えてくださった多くの先生方、奇特にも、私をもらってくれた主人にはどんな感謝の言葉も足りない気がしますが、これも運命ということで今後も前向きにお付き合い頂けたらと思います。

卒業にあたり

顎顔面口腔外科学分野 池 野 良

2005年に新潟大学大学院顎顔面口腔外科に入学し、4年が経過しました。入学時は4年間という時間は長いと感じていたのですが、現在の心境で

は短かったと感じています。短く感じる原因は、我に返る暇を与えない医局の忙しさ、いやいや充実感だと考えています。

大学院1年目は外来、病棟、麻酔という口腔外科の研修を4ヶ月ずつローテーションし、その後は高木教授と共に感染症の研究を3年間させて頂きました。この4年間の思い出を簡単に振り返ってみます。

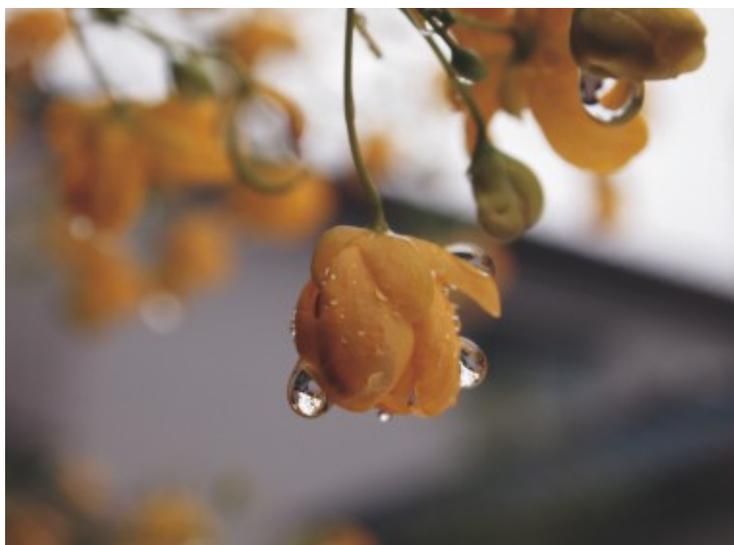
大学院1年、意気揚々と大学院入学したが同期は誰もいない事が判明。諸先輩方に、「1人で大変だねえ、まあがんばって」と聞き様によっては熱い激励を受けました。しばらくすると、数多の医局行事が訪れ「まあがんばって」の意味がわかってきたのは冬（当科の年末統計のころ）でした。色々ある医局行事を何とか執り行う事が出来たのは、先輩方の力があってこそだと実感しています。「がんばれ」と言いながら、助けてくれる先輩方の男気（女性の先輩もいますが）には感謝しています。大学院1年時の最も印象深いイベントは実は交通事故です。大学病院からの帰宅途中で、事故に会い再び大学病院に戻ってきたのを今でも鮮明に覚えています。「そんなに帰りたくなかったのか？」と後日ありがたい言葉を先輩に頂きました。確かに帰りたくない日もありますが……。

2年目以降は、臨床に加え研究も始まりました。私はHIVの研究をさせて頂きました。HIVについての知識は一般知識程度しか無く、臨床・研究ともに不安だったのを覚えています。不安の解消

方法は、勉強でした。様々な文献を読み知見を増やしたつもりです（まだまだ、知識は少なく恥ずかしい限りです）。研究では、2年の後半より当科と関連のある慶應大学免疫学教室加藤真吾先生からも御指導頂きました。毎月慶應大学に通い、加藤先生から厳しくも丁寧に実験・研究の手解きをして頂きました。ウイルス学だけではなく、検査体制や倫理の問題など、今まで勉強してこなかった分野の知見が得られました。加藤先生とはよくノミネーションをさせて頂きました。その時間いた科学の面白さや可能性について話は興味深く、最先端の科学というものをチラッと見せて頂きました。

大学院3年目で行った日本エイズ学会の発表は印象深いものでした。やっとでた研究結果での報告は、思い入れが強くなるものです。それ以上に、記憶に残った理由は、発表時にオーベンが学会に来られず1人だったことです。質問の返答には、手に汗握るものがありました。結果として、この経験が自信となりました。

臨床、実験、学会発表や論文制作等と日々を過ごすうちに、気付けば4年が経過していました。この4年は私の人生の中で濃厚な4年であって、色々な経験をさせてもらいました。知識や技術が増えました。体重とお腹まわりも増えました。今後は、「知識を増やして、体重減らせを」を座右の銘にしてがんばっていかうと思います。



平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(学術)	鈴木 亜夕帆 (予防歯科学)	義歯による疼痛が高齢者の食品摂取に与える影響
博士(歯学)	ALVARADO GALVEZ CARLOS ALBERTO (顎顔面口腔外科学)	Nuclear translocation of β -catenin synchronized with loss of E-cadherin in oral epithelial dysplasia with the characteristic two-phase appearance (口腔粘膜の二層性異型上皮における β カテニンの核転位とE-カドヘリンの消失の同期)
博士(歯学)	SOBHAN UBaidus (顎顔面口腔外科学)	FGF23 is mainly synthesized by osteocytes in regularly distributed osteocytic lacunar canalicular system established after physiological bone remodeling (FGF23は生理的骨改造で規則的に構築された骨細管系の骨細胞によって合成される)
博士(歯学)	AL-ERYANI KAMAL AHMED HASAN (口腔病理学)	Hemophagocytosis-related keratinization in squamous cell carcinoma and carcinoma in-situ of the oral mucosa: a possible histopathogenesis of keratin pearls (口腔粘膜癌細胞による赤血球貪食誘導性角化: 癌真珠の形成機転)
博士(歯学)	BATHEEGAMA GAMMACHARIGE THARANGA LAKMALI NANDASENA (口腔解剖学)	Immunolocalization of aquaporin-1 in the mechanoreceptive Ruffini endings in the periodontal ligament (歯根膜の機械受容性ルフィニ神経終末におけるアクアポリン1の免疫組織化学的局在)
博士(学術)	増田 明美 (口腔生理学)	通信制高等学校保健室における健康支援に関する研究—常勤の養護教諭が配置されている通信制高等学校保健室の課題と健康支援の実態より—
博士(歯学)	敦井 智賀子 (摂食・嚥下リハビリテーション学)	下顎運動時の胸鎖乳突筋ならびに後頸筋群の筋電図学的評価
博士(歯学)	篠倉 千恵 (歯科矯正学)	骨格性下顎前突症患者における嚥下時筋活動様式の特徴
博士(歯学)	中川 英蔵 (歯周診断・再建学)	Odontogenic Potential of Post-natal Oral Mucosal Epithelium (マウス口蓋粘膜上皮細胞を用いた歯胚再生)
博士(歯学)	竹内 優美子 (小児歯科学)	前歯部萌出状態が小児の一口量に及ぼす影響
博士(歯学)	本間 喜久男 (生体材料学)	陽極酸化を行った Ni-Ti 矯正用ワイヤのフッ化物を含む酸性溶液中での耐食性の評価
博士(歯学)	杉浦 貴美子 (予防歯科学)	小規模障害者施設における心身障害者のう蝕及び歯周病の罹患状況に関する調査
博士(歯学)	薄波 清美 (予防歯科学)	特定高齢者における口腔機能向上プログラムによる口腔機能向上効果
博士(歯学)	梅津 英裕 (予防歯科学)	Association between Glucan Synthesis by <i>Streptococcus mutans</i> and Caries Incidence in Schoolchildren using Fluoride Mouthrinse (フッ化物洗口実施小学校児童における <i>Streptococcus mutans</i> によるグルカン合成とう蝕発生との関連)
博士(歯学)	浅井 哲也 (う蝕学)	Effect of overglazed and polished surface finishes on the compressive fracture strength of machinable ceramic materials (マシーナブルセラミックの圧縮破折強度について—表面研磨及びブレース焼成の影響)

博士の専攻分野の名称	氏名(専攻)	博士論文名
博士(歯学)	小林 英樹 (小児歯科学)	学校給食による咀嚼パラメーターの比較検討—麺類、米飯類、パン類の相違点について—
博士(歯学)	川崎 真依子 (生体歯科補綴学)	Evaluation of newly developed devices for denture placement and removal in the dependent elderly (要介護者のために新しく考案した義歯着脱補助具の評価)
博士(歯学)	池野 良 (顎顔面口腔外科学)	HIV-1感染者における唾液中ウイルスの定量的研究
博士(歯学)	HOSSAIN MOHAMMAD ZAKIR (口腔生理学)	Discharge of muscle spindles of jaw-closing muscles during chewing different hardness of foods in awake rabbits (硬さの異なる食物咀嚼時における閉口筋筋紡錘の活動様式)
博士(歯学)	鈴木 温子 (口腔生理学)	介護老人福祉施設の実態と介護職員の評価
博士(歯学)	内藤 守 (摂食・嚥下リハビリテーション学)	統合失調症患者における多飲行動と口腔乾燥感および唾液分泌量との関連
博士(歯学)	近藤 匡晴 (摂食・嚥下リハビリテーション学)	Impact on Eating Functions of the Elderly in Need of Care with Home Care Management and Guidance (居宅療養管理指導が要介護高齢者の摂食機能に及ぼす効果)
博士(歯学)	三浦 俊英 (口腔生化学)	ラット血中骨型酒石酸抵抗性酸性フォスファターゼ(TRACP-5b)測定試薬の開発とその基礎性能
博士(歯学)	高井 貞浩 (組織再建口腔外科学)	顎変形症患者における咽頭気道形態の3次元CT評価
博士(歯学)	岩崎 正則 (予防歯科学)	Longitudinal study on the relationship between serum albumin and periodontal disease (血清アルブミンと歯周病の関係についての経年的評価)
博士(歯学)	金子 正幸 (予防歯科学)	Relationship between root caries and cardiac arrhythmia (後期高齢者における根面う蝕と心臓不整脈の関連)



平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻論文博士取得者

博士の専攻 分野の名称	氏名	博士論文名
博士（歯学）	Wanninayake Mudiyanselage Tilakaratne	Epithelial salivary tumors in Sri Lanka: A retrospective study of 713 cases (スリランカにおける上皮性唾液腺腫瘍713例の臨床病理学的解析)



平成21年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻修士課程修了者論文名

修士の専攻分野の名称	氏名	修士論文名
修士 (口腔保健福祉学)	市川 加奈	Relationship between the amount of saliva and medications in elderly individuals (高齢者における唾液量と薬剤との相関について)
修士 (口腔保健福祉学)	大岩 典代	口腔癌放射線治療患者に対し口腔ケアを行った経験—患者 QOL からみた口腔ケアの有用性に関する検討
修士 (口腔保健福祉学)	丸山 美嶺	施設入所承認申立等裁判例からみた子ども虐待の援助課程に関する研究
修士 (口腔保健福祉学)	石澤 尚子	新潟県内の障害(児)者福祉施設における食介助および摂食機能維持向上のための取り組みの現状
修士 (口腔保健福祉学)	平林 友香	要介護高齢者に対する口腔ケアに関する研究～認知症対応型共同生活介護事業所介護職を対象とした質的調査から～
修士 (口腔保健福祉学)	米澤 大輔	Cardiovascular disease and antibodies to <i>Porphyromonas gingivalis</i> : a result from a Japanese cohort (心血管疾患と <i>Porphyromonas gingivalis</i> に対する血清抗体価との関連について：日本の後向きコホート研究における報告)

